

クロスの話

105 慶應義塾志木高等学校

ここに来たのはいつからだろうか。思いつく限りの昔から、僕は1日中渋谷の街をふらふらと漂い続けている。

今日の朝は街に霞がかかっていた。春待ち月がひらひらと始発電車の窓に差し込んで、道路に不連続な光の跡を映し出していた。

昼ぐらいから降り始めた雨は、ビルの輪郭を溶かす。体が濡れないように地下に入る。

地下構造は渋谷を、大気と大地の交差する立体的な街たらしめる。この複雑さが渋谷の面白さだと思う。しかし、僕は地下では歓迎されてない。

雨は暫くして止んだ。日暮れに近づくにつれ、蒸し暑さも和らいでゆく。夕日が街を染めてゆく。ビルの間に爽籟が響く。ああ、何度目、だろう。

僕はこのままでいいのだろうか？

夜はかなり冷え込んだ。凍りついた光が真っ黒な僕を夜から洗い出す。嘴の先に銀色の月が煌々と光る。

僕は翼を精一杯広げる。

真下に見えるのは、時間と空間と人が複雑に交差する街、渋谷。

そんな街を旅立つ一羽のカラスの話である。

